

【新聞活用学習】高校1年生・家庭科・地歴公民科・探究学習／高校2年生・探究学習ほか
都市部大規模校の「探究的学び」における新聞活用

指定校2年次 長野県松本県ヶ丘高等学校 宮坂 正議

（１）本年度のN I E活動の概要

研究指定校1年目は、比較的大規模の高等学校として、新聞活用を組織的に実践することの難しさを痛感した。高等学校の現場はいわゆる「高大接続改革」に対応しながら、あたらしいICT活用等を含む「探究」の試みと、進路実現とを両立させなければならないという難しい課題に直面している。その指導体系はいまだ模索の段階であり、新しい実践を次々に展開しながらも、3年間の学習計画が完成しているわけでは必ずしもない。昨年度はそのなかに新聞を使った学習を取り入れるべく検討したが、多くの場合単発に終わったといわざるを得ない。

本年度は、そうした課題意識の上で、「探究」と新聞を結びつけながら、N I Eを学校全体の取り組みとして定着させるべく努力した。生徒たちの「探究活動」と同じように、本校におけるN I Eも、やや前のめりにトライ&エラーを繰り返しながら、どのような活動が本校に向いており、より実のある教育効果を認めることができるのか、実証的研究を行ったつもりである。

ここでは「成果」といえるものはほとんどないものの、昨年度に比べれば、わずかながらN I Eが「探究」的実践のなかにスッとすべり込ませることに成功したと考えている。

（２）本年度のN I E活動の取り組み状況（４月時点）

本校は全校生徒959人、ひと学年8学級の計24学級という大規模校である。そのうち1・2学年は普通科6学級・探究科2学級、3学年は普通科7学級・英語科1学級である。家庭での新聞購読率は決して高くはないと考えられるが、社会的課題に関心を持つ生徒は多く、新聞を媒介にしながら社会と接点を持つことで、新聞への関心を高めることに対するポテンシャルは高い。

本年度も、教科で新聞記事を活用したほか、新たな試みとして探究学習へのN I Eの応用を模索した。2年生普通科の海外研修や1年生の国内研修、希望研修等で取材講座をお願いしたほか、探究学習で他の情報分析ツールと同じように新聞を分析するよう促した。また、普段の生活の中で新聞を読み、その利点を体験的に理解させることで、日本語力を中心としたリテラシーの涵養を目指す試みも企画した。

（３）N I E活動のねらい（育てたい力）

本校で設定したN I E活動のねらいは次の2点である。

①新聞を通じた情報リテラシーの涵養

個々の生徒による探究活動や探究的な授業実践をとおして、情報源としての新聞を活用し、インターネットなど、ほかのさまざまな情報源と比較しながら、どのような情報が適切であるのか選び取る力を涵養する。

②新聞を通じた主権者意識の醸成

社会との接点としての新聞を見直し、自らが社会の形成者であることを自覚しながら健全な批判力をもつ主権者としての意識を醸成する。

(4) 全校での取り組み

《新聞閲覧コーナーの設置》

昨年度につづき、9月から12月まで新聞8紙を自由に閲覧できるコーナーを渡り廊下に設置した。特に3年生はその時期、大学推薦入試の準備等に活用できるため、それぞれの個別指導のなかで、活用できたものとする。

《いっしょに読もう新聞コンクールへの応募》

昨年度は1年生のみの応募だったが、本年度は1・2年生全体で取り組んだ。2年生はゴールデンウィークの課題、1年生は夏季休業の課題として、他の教科学習の妨げにならないよう配慮した。また、1年生は同コンクールとほぼ同じ形式の課題を、入学準備課題として課している。本年度は学校奨励賞もいただき、学校全体の同コンクールへの意義が認知されつつある。

《校外研修における取材講座等の実施》

①1学年「東京研修」

1年生は12月に「東京研修」を行った。本年度は2泊3日の行程で、特に2日目は生徒が学級を超えた6人班を形成し、班ごとに設定したSDGsの項目をテーマに、企業や団体等がどのように取り組んでいるか取材する企画とした。訪問企業・団体はすべて生徒が自ら調べてアポイントメントをとっており、丸一日の行動・研修計画はすべて自分たちで計画するものであった。事前研修のひとつとして信濃毎日新聞読者センターさんにご協力いただき、「取材講座」をお願いした。東京研修のまとめは新聞形式というわけにはいかなかったが、外部の人間に「インタビュー」を行う際の基本的な方法、態度等について、1学年全員を対象にレクチャーいただいたことは、内弁慶な本校生には非常に役立った。

②希望者による「東北スタディツアー」

夏休みの後半をつかって、希望者による3泊4日の東北スタディツアーを企画した。福島県福島市・相馬市、宮城県仙台市・石巻市をめぐり、東日本大震災の「被災」地域の学校や原発問題に揺れる地域、東北大や石巻日日新聞社などめぐり学習する盛りだくさんの企画であった。その事前学習として「取材講座」をお願いした。

③2学年「台湾研修」

2学年普通科の台湾研修のまとめのひとつとして、情報科の授業で生徒全員が新聞形式のレポートを作成してはどうか、ということだった。限られた時間のなかでの提案であり、当初から予定していたわけではなかったため、非常に難しかった。情報科の授業であるのでパソコンを利用することが前提となるが、生徒個人がMS-Wordなどで縦書きの新聞をレイアウトするには、かなりの技術と時間とを要する。なんとかテンプレートは作ってみたものの、結果的にこの試みは挫折した。



信毎取材講座の様子



JAMSTEC(海洋研究開発機構)での取材の様子

《新聞 1 分プレゼン》

年度当初、1 学年会では、毎日の S H R のなかで、気になった新聞記事をグループ内で 1 分間でプレゼンしあう「新聞 1 分テキパキプレゼン」を企画した。このプレゼン手法は、昨年度の全校 N I E で斉藤孝さんが提案していたものを参考にした。しかし結果的には、毎日の S H R での連絡事項が多すぎ、とても新たな試みを入れるような余裕はなかった。そこで、家庭科の授業で何度か実験的に試みてくださった。毎週というわけにはいかないが、一応全員が新聞記事を使った 1 分プレゼンを行うことができた。これを継続させる知恵が課題である。

《主権者教育での新聞活用》

3 年生は選挙権を持つ者も多い。昨年度から主権者教育のひとつとして「模擬選挙」を実施しており、3 年生で「マニフェストスイッチ」の記事を活用させていただいている。特に 3 年生は継続して時間を確保することが困難なので、L H R における学年集会でその学習を行った。その時間だけなので深く学習することはできないが、昨年度も本年度も信大生のグループを招き、ピア・エデュケーションの形をとっている。

また、本年度は夏の参院選や年度末の松本市長選で、立候補者に新聞紙上で直接質問するという企画に何人かの生徒が参加させていただいた。新聞を読むだけでなく、新聞に「出る」ということが、その生徒にとっての学習の機会になるばかりでなく、同じ高校生が登場する新聞はやはり読みたくなるもので、多くの刺激を得ることができたし、新聞を媒介に社会とつながっている意識を具体的に持つことができたものと考えられる。

《探究学習における新聞活用》

普通科では「総合的な探究の時間」、探究科ではそれに加え「探究基礎 α (1 年次)」「探究実践 α (1 年次)」といった学校設定科目を設置し、信州学をはじめとする探究学習を行っている。いずれも本校の W i - F i 環境を活用し、R E S A S (地域経済分析システム) 等による基礎情報の洗い出しが探究の入り口になる。本年度はそこに「信毎データベース」を積極的に活用するよう呼びかけた。生徒は「調べ物」となるとまず「インターネット」という世代だが、ネット環境を利用しつつも新聞記事にアクセスさせることで、多様なメディアのひとつとして新聞が活用できることを学ばせた。

1 年探究科では、ある生徒は「長野県の健康寿命を延ばす試み」を提案しようとする過程で

県外から見た魅力 SNS で
特色まとめ多言語パンフに
羽田氏 小松氏

教育機関へのエアコンの設置 どう考える？

2019 年 7 月 3 日付 信濃毎日新聞

信毎データベースにあたり、諏訪中央病院の鎌田實先生の記事を見つけ、鎌田先生に直接教えを請おうと電話した。また別の生徒は特定外来魚であるオオクチバスの駆除法を探す過程で、過去の新聞記事から「電気ショッカー船」「発信機をつけた外来魚を放ち越冬場所を特定、駆除（天竜川・千曲川）」「産卵場所の親魚、卵を捕獲」「ブルーギルをナマズに食べさせる『ギルジゴク』」の4つの駆除法に着目し、自らの探究の出発点とした。

（５）公開授業などの活動内容

本年度行われたN I E授業のなかでも、探究科で行った授業のうち二つを以下に報告する。「A」の授業は特定の新聞記事を読み、そこから問題意識を醸成するもの、「B」の授業は新聞データベースの検索から多くの情報を引き出し、それを生徒が活用する事例である。

A イスラーム女性のスカーフ論争から多文化共生社会を考える（探究科1年・世界史A）

①本時の視点とねらい

19世紀における世界分割は、欧米が植民地化諸地域を「周辺」として支配する構図をうみだし、さらに南アフリカにおけるアパルトヘイトやオーストラリアにおける白豪主義など、典型的な人種差別主義を定着させた。また、フランスはアルジェリアの植民地化において、アルジェリア女性からヒジャブを脱がすことは、「ムスリム女性の解放」や「ムスリム社会の文明化」といったフランスの使命であるとして、支配の口実に利用した経緯がある。脱植民地化を目指してきた現代においても、エスノセントリズムの克服や人種差別問題の克服は人類共通の課題であるという認識にたち、そうした課題を主体的に考え、我々の生活と歴史との関係性に触れる。

ポスト植民地化社会におけるグローバリゼーションとともにさらに進展する多文化・多宗教状況に鑑み、エスノセントリズムを越え、共生社会を構想することがますます重要になってきたが、現実世界では文化・宗教摩擦も顕在化している。ここでは、歴史的経緯を踏まえながら、文化相対主義を主体的に考えることによって、共生社会をアクチュアルに構想するための想像力を涵養する。具体的には、イスラームにおけるジェンダー観の象徴とみなされがちな「スカーフ（ヒジャブ）」を例にとり、単純な相対主義と普遍主義のあいだで揺れる現実の共生社会について主体的に考える。

②本時の展開の概要

フランスにおける学校を含む公共施設でのスカーフ着用禁止を報じる記事をよみ、さらにその理由をしめすいくつかの資料や各国の対応の違いを意識させながら、日本において（本校において）はどのような対応が望ましいかグループごとに考えさせた。その際、スカーフを禁止するにせよ容認するにせよ、その理由をミニ・ホワイトボードに書かせ、授業者が図のように分類・整理した。その上で、単純な「普遍主義」でも単純な「相

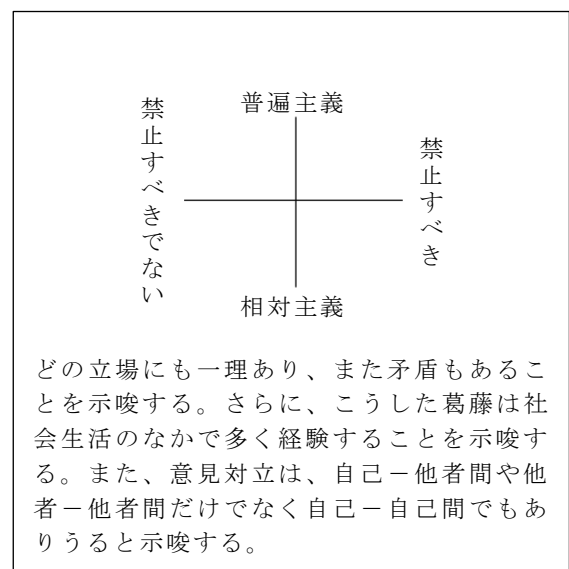


図 グループの立場の依拠する原理の概念整理例

対主義」でも、真の異文化共生はできなさそうであることを示唆してまとめとした。授業終了時にはリフレクションを入力させた。

B 信毎DBを用い辛亥革命の歴史的意義を多角的に検討する（探究科1年・世界史A）

①本時の視点とねらい

辛亥革命は、アジア初の共和制国家を誕生させ、中国史にとって近代化への大きな転換点となった。一方で、袁世凱は自ら皇帝になることを画策するなど、必ずしも近代的理念をもとめて邁進したわけでもなく、孫文らの第二革命も失敗している。袁世凱死後の中国は軍閥割拠状態となり、孫文等の掲げた革命の理念とはほど遠い状態になったと言わざるを得ない。

本時は、そうした「辛亥革命」が現代にとってどのような意味を持つのかを強く意識しながら、歴史事実の批評を目指す。その際、現代的視点を色濃く反映するメディアである「新聞」に着目する。授業ではデータベースを用い、生徒が自ら辛亥革命に関する新聞記事を検索することで、主体的に事実を理解し解釈し、歴史事象に関する思考・判断力を涵養できるよう配慮する。



iPad を用いて信毎データベースから記事を検索し、グループで検討

②本時の展開

段階	学習内容	学習活動	指導・助言
導入 (5)	本時の活動方針と目標。	- 前時までの学習（辛亥革命の経緯）をスライドで確認し理解する。 - 授業者の話を聞き、本時の活動の手順とその狙いを理解する。	- 前回までに調査した新聞記事を振りかえるよう指示する。 - 実際に電子黒板にデータベース上の記事を投影し、発表のイメージを提示する。
展開 1 (15)	グループ内発表。 - グループ内で辛亥革命の評価についての意見を共有する。 - グループ内協議とグループとしての意見のまとめ。 - 発表方法の確認。	- 順番にグループ内で発表する。 - ディスカッションしながらグループとしての意見をまとめる 「理由」の部分をホワイトボードに簡潔に表現する。 - 発表の作戦を練る。	- 生徒への指示は、すべて電子黒板上でも表示する。 - 電子黒板のタイマーを活用する。 - 班員の意見をなるべく複合的に取り入れるようにするよう指示する。 - 他の班と同じにならないよう気をつけるよう指示する。 - ホワイトボードに書く際は簡潔にキーワード型で書くよう指示する。
展開 2 (25)	グループの意見の発表と共有。	- 黒板にホワイトボードをはりつけながら発表する。 - 根拠となる記事を電子黒板に投影しながら発表する。 - 質疑応答含めて1班2分×10班	班員全員が前に出ること、また発表は工夫するよう指示

ま と め (10)	・まとめの理解と リフレクシ ョ ン	・Classi を用いて、80 字 以内（2 文）で感想等 を入力する。	・教員のまとめとして、立場や重視 する概念の違いによって、歴史事 実の評価は異なることを示唆す る。 ・Classi へ入力されたものを投影し、 共有させる。
---------------------	-----------------------------	--	--

（６）生徒の反応

A イスラム女性のスカーフ論争から多文化共生社会を考える（探究科 1 年・世界史 A）

多くの生徒が多文化共生について、常識的に「世界にはさまざまな文化があり、それぞれ尊重されるべき」だと考えている。しかし、この実践ではその常識に揺さぶりをかけ「ほんとうに互いに文化を尊重できるのか」「尊重するためにはどのような仕組みが必要なのか」を、具体的に考えさせ「多文化共生」を自分のことばで語らせることを目指している。タブレット端末から入力された生徒のリフレクションをみると、常識的な「尊重すべき」という意識が揺さぶられ、その内実について考え始めた姿もみられる。新聞記事に語られた事実が生徒を刺激し、考えるきっかけとなった。その意味では、ある程度の成果があったものと考えられる。しかしながら、本授業が「世界史 A」の授業であることを考えると、歴史事実が我々の文化観にどう影響し、どう認識を制限しているのかについてまで言及しようとした生徒はなく、やや「現代社会」寄りになってしまったと言える。

参考 生徒によるリフレクションから A

「現代において異文化を理解尊重し共生するうえで大切なことは何だと考えますか？」（生徒の声は原文ママ）

- 多くの事情を知ってよく考えること。憲法や宗教、国によっても考え方や方針、が違うからそれを踏まえてよく知ってから自分だけではなく意見を聞いて考えていくことが大切だと思う。
- 一つの観点や意見に固執せず、広い視野で物事を考えること。例えば今日の授業の話題で言えば、私個人の意見としては禁止するのは賛成できないけれど、禁止しようとする人の意見も理解できると感じた。
- もちろん宗教的な考え方や、身なりは尊重すべきであり無理にやめさせたり変えさせるのは間違っている。ただ、対立や孤立、人権を否定されるような事があるのも事実だから、まず全ての人が自分らしさを表現できるという大前提を置き、その上で宗教上の決まりやルールを尊重すべきだと考える。
- 一番大切なことは、互いの文化を理解することからだと思う。確かに、もしも自分のとなりにブルカを被っている人がいたら、怖くなっちゃうかもしれないし、いじめ・差別が出てきちゃうんじゃないかという心配はある。だから、相手のことを自分から学ぶべきだと思うし、相手の話に耳を傾けることが大切だと思う。フランスみたいにお互いを尊重するためにも、あえて公共の場では他の宗教を傷つけないようにすることも 1 つの手で、確かにそれも一理あると思った。
- 宗教の自由をどの程度まで尊重するかをいろいろな角度から考えることだと思いました。理由は、自分をはじめ宗教同士の対立を考えて禁止すべきでないと考えていましたが、ほかの意見を聞いて納得する部分もあったし、規則を定めた後のことも考えると考え方が変わってきたからです。

B 信毎 DB を用い辛亥革命の歴史的意義を多角的に検討する（探究科 1 年・世界史 A）

一つの記事を読み込むのではなく、自ら関連する記事を探しそれを発表したことは、事実を主体的に解釈しようとする姿勢をもつきっかけになったと考えられる。また、ここでは歴史事実の評価（批評）を行おうとしているが、依拠する立場によって評価は異なること、「歴史」は、事実のひとつであっても見方は多様であり、見方の対話のなかから「未来」を構想することの大切さを知ってもらうことが、この授業の目的のひとつである。誰がその事実を見るのか、巨視的に見るのか微視的に見るのか、結果を見るのか、過程をみるのか、さまざまな見方ができることを、生徒はそれなりに感じたようである。その意味で、新聞が事実をさまざまな段階で、時には専門家の見解も含めながら多様な観点から記事にしていることが手に取るようにわかるデータベースの活用は、今回の授業の目的からすれば成功だったと考える。

ただし、「辛亥革命」という事実深く切り込んでゆくことはできず、生徒の中には事実誤認も複数みられた。歴史事実だけでなく、歴史の見方を学ぶことを重視する新学習指導要領における「歴史総合」を意識した実践であることをふまれば、今回のような授業を出発点として、生徒が興味関心を深め、事実の探究へ向かうよう年間計画を組み立てる必要があるものと考えられる。



用いた記事を電子黒板に投影しながら、グループの見解を発表

参考 生徒によるリフレクションから B

「今日の授業への自分の取り組みや感じたことを次の条件で書いてください。【80 字以内 2 文 二つの文は接続詞でつなぐ】」（生徒の声は原文ママ）

- 最初は、中国のことを日本の新聞で調べることはできないと思っていた。だが、班の中で色々な記事を共有し、考えることで答えが見えてきた。
- さまざまな記事を読んだり友達の意見を聞いてその考え方を知り、辛亥革命という一つの出来事でも立場や背景によって考え方が違う、というのは面白いなと思いました。また、その立場や背景を深く知ることが大切だなと思いました。
- 班で選んだ記事が被ることが数回あった。だが、引用部分によって、意見がまるで逆で、新たな視点を持つことができたので、より知識が深まったので良かった。
- 同じ新聞であっても引用する文が違ったり考え方が違って面白かった。また、新聞を使うことで教科書に載っていない事実や記者の考え方を学ぶことができ深く知れた。
- 班のメンバーに自分の意見を根拠を持って話すことが出来たので良かったです。また、自分とは違った考え方を沢山知り、辛亥革命について深く学べたと思います。
- 私は、弱体化で最悪だとして考えておらず、経済成長や経済格差など他の視点からも評価が出来なかった。だから、これからも1つの観点に捉われず、沢山の記事を読むようにしたい。
- 辛亥革命は孫文目線や国民目線で見ることで、よかった所やあまりよくなかったことが沢山出てきて面白かった。だから、辛亥革命から学び、良いところは真似して、あまりよくなかったところはどこがよくなかったのかを考えながらこれから社会が出来ていけばいいと思った。
- 台湾との対立については自分の周りでは話題に上がらなかったの、大きな出来事の裏では必ず辛い

思いをする人がいるということを理解しなければいけないと思った。ただ、良い影響があったことは確かなので、いろんな視点からみた意見を持つことが大事だと思った。

- 革命というものは人々のためになるから歴史の中で多くの人が起こしているのかと思っていたが辛亥革命のように必ずしも指導者の意図通りにはならないまたはある特定の人種や部族が傷つけられたり差別されてしまうこともあるのかと思ってかなしかった。しかしその中でもメリットはあるにはあるわけだから一概にいい悪いと言えないのが難しかった。
- 私は差別の面から最悪だと考えたけれど班で同じ面から考えた人が良い所も見つけていて色んな見方があると思った。このことから物事をさまざまな面から捉える事を心掛けたい。
- 辛亥革命を中学校で習ったときには、日本と中国の関係性から始まったものだと思っていました。しかし、新聞で記事検索をしていると、日本と中国以外の国から見た視点で書かれているものや世界への影響などが書かれていて、事件や革命1つとってもいろいろな考え方や見え方を考えることが必要だと思いました。
- 辛亥革命により民族間のつながりが強まったと考えていた。しかし、三民主義の民族主義により満州人やチベット民族などが差別的なことをされていたことも分かって、もっと違う視点からもそれについて知りたいと思った。
- 自分は意見の散らばりがなかったのであまり面白くないなと思ってしまったが宮坂先生が最後に客観視出来ていると言っていて偏った意見があればいいわけではないとわかった。
- 私は辛亥革命の知識がなかったので正直どの視点から見ればいいのかすごく苦戦しました。でも、色々な記事から辛亥革命のことを学べ、それぞれの見方を共有できてすごくいい機会だったと思いました。
- 僕は中国のことにしか目をつけず辛亥革命について調べていた。しかし、他の班の発表を聞いている国々の革命と比較してやっているとところがありいろいろな視点で見ることは大事だと思った。

（7）成果と課題

生徒につけさせたい力の面から言えば、「①新聞を通じた情報リテラシーの涵養」「②新聞を通じた主権者意識の醸成」の二点において、単発の実践のそれぞれの場面ではある程度の教育効果があったものと考えられる。例えば「辛亥革命」の授業で言えば、新聞を読むことによってさまざまな意見の立場があることが理解でき、①が求める力の一側面をカバーすることができた。また、「スカーフ」の授業で言えば、起こりうる問題について実際に自分の高校をどうするのかについて、新聞記事から他国の状況をふまえて考えることができたことは、②の求める力の一側面をカバーしたことになる。他の実践についても、多かれ少なかれ①・②をカバーできたことは当然である。課題はこれらが体系的にできたわけではない、ということである。

本年度の新たな試みとして掲げた「探究学習へのNIEの応用」についても、「滑り込み」というかたちでなんとか個別の実践にはなった。ただやはり体系的にできたわけではない。

来年度以降の課題は、やはりNIEを学校全体の教育活動のなかに体系的に位置づけることである。さまざまにネーミングされた（つまり「〇〇教育」というもの）新しい教育の諸概念は、高校現場ではどうしてもバラバラに「なんとかこなしている」という状態になりがちである。NIEに限らず、それらを有機的に結びつけることが大切であろう。本年度のNIE研究は昨年度に比べれば広がりをもたせることができ一定の成果があったが、今後はこれを3年間のカリキュラムの中にそれぞれ明確な意味(機能)を持たせる研究を続けてゆきたいと考える。